



シリーズ 企業訪問

株式会社 林養魚場

～ おいしいサーモンと釣りの楽しさを
提供する国内有数の養殖企業 ～

企業概要

代表者：代表取締役 林 慎平 従業員：60名
所在地：西白河郡西郷村大字小田倉字後原66 TEL：0248-25-2041
事業概要：淡水魚養殖、釣り施設等の経営 FAX：0248-25-3232
設立：昭和43年2月 URL：http://www.hayashitROUT.com
資本金：1,000万円



取締役副社長
林 総一郎 (はやし そういちろう)

サケやマスは古代から人々が食材としており、最近ではヘルシーな高級食材として非常に人気がある魚です。

日本におけるサケ・マス類の養殖は、1877年(明治10年)に北米より寄贈されたニジマスの卵を孵化させることによって始まりました。

西郷村の「株式会社林養魚場」は、サケ・マス類の養殖や釣り場の運営を行う、国内有数の養殖業者です。今回の取材では林総一郎副社長に、当社の事業内容や取り組み状況などについてうかがいました。

○ 創業の経緯を教えてください。

1935年(昭和10年)に私の祖父が西郷村でニジマスの養殖をはじめたのがきっかけです。

当時は食糧が不足しており、食糧生産は国家的課題でした。社会的な需要があり養殖業を開業したのです。

祖父は東京で生まれ育ちましたが、曾祖父は終戦直後の片山哲内閣で国務大臣を務めた福島県選出の国会議員でした(林平馬：現喜多方市塩川町出身)。そんな縁もあり、当地で養殖に適した場所を得て開業しました。



当社社屋



養魚池の魚

1968年（昭和43年）に株式会社として法人化しました。その後、施設の拡大や釣り堀などを開設し、現在は養魚施設6か所、釣り場施設5か所を運営しています。現在は父の林慎平が2代目の社長を務めています。

○ 御社の事業内容と取扱商品について教えてください。

サケ・マス類の養殖と、釣り場施設の運営を行っています。

養殖は、大きく分けると食用部門と遊魚部門の二つに分けられます。食用部門については「品質・味」、遊魚部門については「釣り人が楽しむこと」がポイントであり、品種改良や餌の配合により、食用・遊魚それぞれに適した魚を育てています。

魚はニジマスを中心にサケ・マス18種類を取り扱っています。創業当初はニジマスから始め、その後イワナやヤマメ、海外からの輸入などにより品種を増やしました。現在は様々なサケ・マス類を取り扱っています。品種改良により当社オリジナルの「メイプルサーモン」という品種も開発しました。カナダ原産のニジマスを大型化し、脂ののった魚に改良したものです。

卵の状態から孵化させ養殖を経て出荷するとい



当社オリジナル商品「メイプルサーモン」の切り身

う全工程を当社がすべて行い、データもすべて記録しています。取引先には安心して提供できるものと自負しています。

釣り場施設については、当社事務所に隣接する日本庭園内に設けた釣り堀「ますつり公園」を1か所、大自然の中で釣りを楽しむフィッシングパーク「フォレスト・スプリングス」を4か所運営しています。

○ 食用部門の強みはなんですか。

食用部門は、鮮度と品質の良さがセールスポイントです。

当社の取引先は国内にある高級料理店や割烹などです。海外からの輸入物と競合しています。

国内に流通している養殖物のサケ・マス類はノルウェー産やチリ産がほとんどで、輸入物が9割以上を占めています。ノルウェー産は氷詰めの生サーモンをチャーター便で日本に空輸しますが、通関手続きなどを考慮すると、最短でも4日程度かかります。また、チリ産は現地で冷凍処理されるので、鮮度が落ちてしまいます。

これに対し、当社は注文を受けてから水揚げします。発送から24時間以内にお客様の元へお届けできるので、鮮度は当社の商品が勝ります。品質についても、輸入物に比べ自信があります。海外では海面のいけすで養殖するのに対し、当社では阿武隈川の源流や湧水を使用した淡水で養殖しています。海の養殖に比べると成長がゆるやかで倍近い時間がかかり、その分コスト高となりますが、じっくり成長するので身のしまったおいしい魚になります。

また、サケ・マス類はにおいが苦手だという理由で敬遠する方もいますので、品種改良に加え餌の配合を調整するなど、日本人の口に合った脂の

濃度にしておいを控え、おいしく食べられるように努力しています。

○遊魚部門の強みや釣り場の特徴はいかがでしょうか。

遊魚部門では、針にかかった時の引きがいい、魚体がきれい、尻尾のスレが少ない等、釣り人が喜ぶような品種の魚を揃えています。様々な品種を養殖して提供できるのが当社の強みです。

釣り場施設については、昭和38年に釣り堀を開設したのが最初です。この釣り堀は、現在も当社事務所に隣接する「ますつり公園」として運営しています。公園のレストランでは、釣った魚をその場で食べることもできます。

また、たくさんの人々に魚や大自然とふれあえる場を提供しようと、平成8年にフィッシングパーク「那須白河フォレスト-スプリングス」を西郷村に開設しました。複数の人工池（ポンド）と豊かな自然が一体化した壮大なスケールが特徴で、フライフィッシングやルアーフィッシング専門の釣り場です。女性や子供向けのポンドやレストハウス・オープンカフェも設けており、釣りの愛好家だけでなく釣り未経験の方やお子さんも楽しめる場となっています。

「那須白河フォレスト-スプリングス」の開設当初は、フライやルアーを使ったスポーツフィッシ



那須白河フォレスト-スプリングスの人口池（ポンド）

ングが楽しめる釣り場は全国でも珍しく、首都圏からも多くのお客様が来場されました。その後、裏磐梯、蔵王、神奈川県にも開設しています。

これらの釣り場では、釣り大会や釣り教室などのイベントも開催しており、多くのお客様が参加しています。

最近では、釣り具や加工品のネット販売を行うネットショップを開始しました。こちらもお客様には好評です。

○人材育成や社員教育はどのようなことを心がけていますか？

「百聞は一見にしかず」で、実物を見せることや体験させることが社員教育になると考えています。私自身、大学卒業後に米国の研究施設へ留学し、養殖技術や漁業経営について学びました。

水産業に関してはノルウェーやカナダなどが先進国であり、学ぶことがたくさんあります。私は商品開発の情報収集のため、よく海外へ出かけます。その際、社員を同伴し取引先などの最先端の施設等を見学させるようにしています。釣り場のスタッフには、アラスカで天然のサーモン釣りを経験させました。

もうひとつ、教育として心がけていることは、「社員の自主性を伸ばす」ということです。仕事を指示する場合、私が1から10まで指示するのではなく「どうしたら早くできるか、楽にできるか、お客様に喜んでもらえるか等、常に意識して自分で考えるように」と指導しています。

○東日本大震災とその後の対応についてお聞かせください。

震災当日はちょうど事務所の引っ越しの日でした。老朽化した建物から新事務所へ、荷物を搬入

している最中でした。

地震による被害は、食堂の壁にひびがはいったり、屋根瓦の落下で車が損傷した程度で済み、重大な被害はありませんでした。社員も全員無事だったのは何よりでした。

しかし、原発事故による放射能汚染の問題が発生し、食用部門は大きな打撃を受けました。原発から80km以上離れた当社の施設・養魚場は放射能汚染はなかったのですが、当社商品は福島県産というだけで敬遠され、注文がストップしてしまいました。福島県産は使わないという声が今でも一部にあります。

当社のホームページに検査結果を掲載するなど安全性のPRを続けた結果、当社の魚の安全性を理解していただき、お客様は次第に戻ってくれました。

○ 今後の展望や抱負についてお聞かせください。

現在、世界の漁獲高の半分は養殖物であり、年々その比率は高まっています。中国に至っては約9割が養殖物で、国家が総力を挙げて養殖に取り組んでいるほどです。世界的にそうした動きは強くなっています。

健康志向の高まりを受けて肉ばかり食べていた地域でサケを食べたり、中国などの新興国で欧米の食文化をまねてサーモンを食べるなど、魚を食べる習慣が広がり、サケ・マス類の需要は高まっています。今後、世界中で魚を食べる需要は増えるでしょう。

そうすると、日本が輸入に頼っていた魚も、これからは簡単に輸入できなくなるでしょう。実際に、サーモンなどの輸入において日本のバイヤーが競り負けする状況が見られます。中国がものすごい勢いで魚を買い集めており、今までの値段で

は購入できなくなっているのです。

このような動向を踏まえれば、国内で養殖業が伸びる余地は十分あると言えます。例えば、年間約20万トンの養殖サケ・マス類を日本は消費していますが、そのうち国産物は1万5千トン程度なのです。輸入物を少し国産物に切り替えるだけでも、国内の養殖業者にとって大きなチャンスとなります。もちろん、それに見合った品質と価格で提供しなくてはなりません、可能性は十分にあるのです。

また、消費者も以前は価格選好が強かったのですが、最近は食に対する安全志向が高まっているため、品質で選ぶという傾向がさらに強まると思われる。

今後も、当社の強みである鮮度と品質をセールスポイントとして、国内市場のシェア拡大に努めていきたいと思っています。

また、そのためにも、最先端の養殖方法の研究や養殖施設の導入により、輸入物に負けない魚を提供できるよう頑張っていきたいと思っています。

【インタビューを終えて】

当社は魚を通じて、その味わいと楽しさを追求・提供し続けている企業です。今回の取材で、伝統や現状に満足することなく最新の技術を取り入れてさらなる成長を目指すという積極的な会社の姿勢がうかがえました。

また、グローバルな視点から業界動向を分析し、当社の将来を語る副社長の言葉は、仕事に対する熱意を感じさせ、当社の更なる発展を強く期待できるものでした。

取材にあたり案内していただいた那須白河フォレスト・スプリングスは広大な敷地に自然があふれ、釣り以外にも散策を楽しめるような気持ちのいい場所でした。皆さんも一度訪れてみてはいかがでしょうか。 (担当：丹治)